

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 13 日現在

機関番号：13401

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2014～2016

課題番号：26780381

研究課題名(和文)「非病理解離」の発生要因及び発生過程の解明

研究課題名(英文) Investigation of source and generating process of normal dissociation

研究代表者

廣澤 愛子(Hirosawa, Aiko)

福井大学・学術研究院教育・人文社会系部門(教員養成・院)・准教授

研究者番号：10345936

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,700,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、日常場面で用いられる解離に焦点を当て以下の2点を行った。1)文献研究を通して、日常的解離と病的解離の相違について、自我の関与の程度がその違いを生むことを明らかにした。2)自我の関与がある程度認められる解離を「解離的対処行動」と定義し、尺度を作成した。さらに、他の性格特性との関連を明らかにした。その結果、3因子からなる尺度が作成され、信頼性・妥当性が確認された。また、解離的対処行動は精神的健康度の高いスキルである一方、非共感性・非内省性と関連が見られ、「本人は良いが、周囲は困る」状況を引き起こすことが示唆された。今後の課題は、解離的対処行動が集団に及ぼす影響を明らかにすることである。

研究成果の概要(英文)：This study achieved the following two results focusing dissociation in daily situation. 1)A literature study determined that differences between subclinical dissociation and clinical dissociation have roots in the extent of ego-relatedness. 2)The result enabled us to determine dissociation with a certain amount of ego-relatedness as a dissociative stress-coping. And, we developed and evaluated the Dissociative Stress-Coping Scale, and revealed what personality trait related to it. Results indicated that it had the three factor model which showed a good internal consistency, good test-retest reliability, and good convergent validity. They also showed that the dissociative stress-coping could mentally stay fit, but related to a lack of empathy and reflection. Thus, it was cleared that the dissociative stress-coping had a possibility to cause the situation, "you have no problem but, the people around you has a problem. It is a future issue to clear how it impacts on others around one."

研究分野：臨床心理学

キーワード：解離的対処行動 消去・忘却 空想的逃避 自己の切り離し 非内省性 非共感性

1. 研究開始当初の背景

従来から、外傷体験等によって引き起こされる“病的解離”については多くの研究がある(Putnum,1997/2001 など)。一方、行動に実感が伴わず、その行動に主体性や責任性がない“非病理的解離”については、その特性を定義して測定を試みた舛田(2008)の調査研究、臨床実践を通して非病理的解離が現代青年に蔓延し、内省力や共感性の欠如に繋がっていることを指摘した岩宮(2009)の研究などがあるが、その構造や発生過程を実証的に解明した研究は極めて少ない。しかし、つらい体験を容易に切り離す非病理的解離は、個人の精神的健康のみならず集団における人間関係にも影響する可能性があり、非病理的解離の構成概念を明らかにすることは、いじめなど集団における今日の問題への影響を明らかにすることにも繋がる重要な研究課題である。

2. 研究の目的

本研究では、以下の3点を目的とした。

(1) 非病理的解離に関する文献研究

非病理的解離を病的解離と区別し、非病理的解離の構成概念を明らかにするために、解離に関する文献研究を行う。

(2) 非病理的解離の尺度作成

文献研究で得られた結果に基づき、非病理的解離の構成概念を満たす項目を作成し、非病理的解離の特性を測る尺度を作成する。

(3) 非病理的解離の特性に関する実証的研究

非病理的解離が、他の性格特性や精神的健康度とどのような関連があるのかを明らかにする。

3. 研究の方法

(1) 文献研究

先行研究(Bernstein & Putnum,1986, 岩宮,2009, 中塚,2009, 舛田,2008・2013, 福井・田辺,2014 など)を踏まえて、非病理的解離の構成概念及び発生過程を捉える。

(2) 調査研究

文献研究で得られた結果に基づき、非病理的解離を測る尺度を作成する。その際、予備調査を踏まえて本調査を実施し、尺度を完成させる。

また、他の性格特性との相関を調べることによって、非病理的解離がどのような性格特性と関連が見られるのか明らかにする。

4. 研究成果

(1) 非病理的解離の構成概念

病的解離との関係については、質的な違いが見られる側面と量的な違いが見られる側面の両方があるという結論が得られた。例えば、先行研究から、空想や忘却といった心理機制については、病的な解離と連続線上にあるものと見做すことができ、病的であるかどうかは、その量的な違いである可能性が示唆された。一方、自己の切り離しについては、

自己の同一性が完全に失われる場合と、自覚的に逃避する場合とでは質的な違いが見られ、前者は解離性同一性障害などの病的解離、後者は非病理的な事なかれ主義と見做すことができた。このように、非病理的解離は、病的解離と質的に異なる部分と、連続線上にある部分の両方があり、質であれ量であれ、病的かどうかの違いをもたらすのは、自我の関与の程度であることが示唆された。

(2) 解離的対処行動尺度の作成

文献研究から、解離が病的かどうかの違いをもたらす大きな要素の一つに「自我の関与の程度」があることが分かった。そこで、非病理的解離を、ある程度、自我の関与が見られるもの、すなわち、「意識的なストレスコーピング」と捉え直し、解離的対処行動と命名した。もちろん、解離自体が無意識的な心理機制であるため、解離的対処行動は「半意識的な」言動と言える。したがって、解離的対処行動には、非病理的～病的まで幅広い解離が含まれ、その中核に、「何らかの方法を用いて、ストレスイベントと自己との接点を無くす」という特性が見られる概念であると定義できる。

① 項目の収集・選定

先行研究に基づき、解離的対処行動の構成概念を満たす項目を作成した。

② 予備調査の実施

大学生を対象に2度の予備調査を経て、項目の追加・削除、項目の文言の修正などを行い、3因子構造を想定した仮尺度を作成した。

③ 本調査の実施

685名の大学生を対象に質問紙調査を行い、解離的対処行動尺度が完成した。

④ 因子構造の検討

因子分析(最尤法・Promax回転)の結果、「自己の切り離し(5項目)」、「消去忘却(5項目)」、「空想的逃避(5項目)」の3因子が抽出された。

⑤ 信頼性・妥当性の検討

内的整合性は、自己の切り離しが $\alpha=.89$ 、消去・忘却が $\alpha=.90$ 、空想的逃避が $\alpha=.82$ であり、十分高い値を示した。また、再検査信頼性は、自己の切り離しが $r=.77$ 、消去・忘却が $r=.93$ 、空想的逃避が $r=.81$ を示し、経時的安定性が認められた。

妥当性については、対人ストレスコーピング尺度(加藤,2000)、DES(Bernstein & Putnum,1986)、包括的解離体験尺度(福井・田辺,2014)、改訂版日常的解離尺度(舛田,2013)などと正の相関が認められ、構成概念妥当性が確認された。

(3) 解離的対処行動と他の性格特性との関連

下位尺度「自己の切り離し」は、他者志向的反応や視点取得といった他者への共感性と負の相関を示すと同時に、空想不全・内省不全と正の相関が見られ、自己からも他者からも切り離された状態にあると言える。しかし、不安・不眠とは負の相関が見られ、精神的な不健康さには結びついていない。次に、

下位尺度「消去・忘却」は、空想不全・内省不全と正の相関が見られ、自己を内省的に捉えることができない傾向が見受けられるが、一方で、自尊感情や本来感とは正の相関が見られ、さらに鬱傾向や不安・不眠とは負の相関が見られるなど、精神的健康度の高さが窺われた。つまり、本人は楽観的でストレスは少ないが、それは内省的態度に裏打ちされたものではなく、独善的である可能性が示唆された。最後に、「空想的逃避」は、他者志向的反応や視点取得といった他者への共感性と負の相関を示すものの、自己志向的反応や想像性とは正の相関が見られ、自己の世界に引きこもりながら、様々な事象を独りよがりにより自己に引き付ける傾向が見受けられる。

これらの結果から、解離的対処行動は精神的な不健康さには結びついておらず、本人にとっては問題がないと言える。しかし、他者への共感不全や自己内省の困難さが見受けられ、「本人はよいが、周囲の人は困る」という状況を引き起こしている可能性が示唆された。つまり、対人関係や集団活動においては問題を引き起こす可能性があると言える。

(4) 今後の課題

これらを踏まえて今後の課題としては、解離的対処行動尺度が対人場面や集団の人間関係においてどのような影響を及ぼすのかを明らかにしたい。例えば、近年、教育現場においてはグループで集団討議を行うことが推奨されるようになってきており、職場でも、個人ではなくチームで仕事をするが増えている。このような昨今の状況の中で、ストレスイベントに直面した場合、解離的な対処行動がどのように用いられ、どのような影響を及ぼしているのかを明らかにしたい。これを明らかにすることによって、解離的対処行動が個人に及ぼす影響のみならず、それが他者や対人関係に及ぼす影響を解明することができ、集団や対人関係における健全性に資する研究知見を提供できる可能性があると言える。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 1件)

1. 廣澤愛子(2014) 被虐待児・者に対するイメージを用いた心理療法の支援効果の機序の検討—外傷体験の語り、イメージの作用、及び CI-Th 関係に着目して—, 心理臨床学研究, vol.32(1), 39-50. (査読有)

〔学会発表〕(計 6件)

1. Aiko Hirose, Tomohiro Takezawa, Sakiko Ogoshi (2016) Influence of attitudes of supporters on independence and sociality of children with

developmental disorders: Analysis of participant observation records in small-group activities, *Journal of Policy and Practice in Intellectual Disabilities*, 60(7-8),788. August 15-19 (Poster session in Melbourne)

2. Aiko Hirose Building of a Process Model of Image-Based Psychotherapy for Abused Victims Including Children”, the 2015 APA Annual Convention, August 6-9. (Poster session in Toronto)

3. Aiko Hirose・Masafumi Ohnishi・Toshiyuki Kishi (2016) Dissociative Stress-Coping Scale(DSCS) : Reliability , Validity , and Related Personality traits, International Congress of Psychology, July 24-29,2016. (Poster session in Yokohama)

4. 廣澤愛子 イメージを媒介とする心理療法とその新たな研究法—被虐待児者に対するイメージを用いた心理療法の支援プロセスモデルの構築—, 日本心理学会, 2015年9月22日—24日.(小講演 in 名古屋国際会議場).

5. 廣澤愛子・大西将史・岸俊行 解離的対処行動尺度の作成—信頼性と妥当性の検討—, 日本教育心理学会, 2015年8月25-27日. (ポスター発表 in 朱鷺メッセ)

6. 廣澤愛子 被虐待体験を抱えた人に対するイメージを用いた心理療法の支援機序モデル, 日本心理臨床学会, 2015年9月18-20日.(ポスター発表 in 神戸国際会議場)

〔図書〕(計 1件)

1. 廣澤愛子(2015)「ジャックと豆の木」に見る少年期の自我発達過程について 大野木裕明・赤澤淳子・中澤潤・千野美和子編 昔話から学ぶ人間の成長と発達—グリム童話からディズニー作品まで,ナカニシヤ出版,

第1部2章, pp.33-37.

6. 研究組織

(1)研究代表者

廣澤 愛子(HIROSAWA Aiko)

福井大学学術研究院 教育・人文社会系部

門(教員養成・院)准教授

研究者番号：10345936